

保育士と母親の親役割認知の比較検討

大 森 弘 子・太 田 仁

〔抄 録〕

本研究は、母親が仕事と家庭の調和をとりつつ自己実現を図るためのサポートシステム構築を目指すものである。具体的には家庭形成に伴う親役割の再吟味を行い、家庭援助等を担う保育士による母親への援助の適合性について検討する。

研究Ⅰでは、保育士より収集した親役割の項目で構成された親役割尺度について因子分析を行った。その結果、保育士が認知する「親役割」は、“個人的生活基礎訓練”，“社会的生活習慣”，“保育士との連携によるワーク・ライフ・バランス”，“親役割受容”，“育児スキル”の概念により構成されていることが明らかになった。研究Ⅱでは、上記尺度を母親に評定を求めた結果，“親役割”は，“保育士との連携による WLB”，“育児スキル”，“親役割受容”の概念により構成されていることが明らかになった。

保育士と母親の親役割認知については、構造化の差異が存在することが明らかとなった。

キーワード：親役割，保育士，母親，ワーク・ライフ・バランス

1. 問題と目的

共稼ぎ夫婦の増加（内閣府，2010）や離婚率の上昇（厚生労働省，2011）など家庭形成における役割の齟齬による不安定な家庭状況と職場の流動化により仕事と家庭の調和（ワーク・ライフ・バランス，以下 WLB¹⁾）は困難な現実がある。例えば長時間労働と家事の両立，仕事と子育ての両立，仕事と介護の両立などである。特に，長引く不況等と相まって，女性の仕事と子育ての両立は緊急の課題となっている。この WLB は，個別化する家族状況の中で不可欠な概念であり，親役割の重要な構成概念でもある。家庭役割，仕事役割，加えて地域の役割といった多重役割（multiple roles）をこなしている共働き世帯の親は，仕事をとるか家庭をとるかといった葛藤（ワーク・ライフ・コンフリクト，以下 WLC）の問題に直面している。また，家族内での個人化志向性の高まり（山田，2004）は，親役割だけに拘束される将来への不安感の原因となり育児不安²⁾へとつながっている。

そして WLB 実現社会に、保育士の果たす役割はきわめて重大であり社会的期待も大きく、具体的に共稼ぎ夫婦やシングルペアレント（片親）家庭をサポートする役割が保育士にある。改訂された保育所保育指針（2008）には、「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務」と明記され、このことを如実に示している。働く親が安心して我が子を預けることができるよう、全保育園の保育内容は質の高い充実したものでなければならない。保育とは子どもの人間性を形成する営みであり、伝達である。保育士は保護者と共に子どもの“いのち”を預かり、“いのちの歩み”を最善の利益をもって支える上での重要なキーパーソンになる。

もちろん、次代を担う子どもたちを産み育てることは、親役割であると共に社会の役割である。しかし現実には仕事と家事・育児との両立が難しく、従来の伝統的性役割による母親を家庭役割に拘束した親役割を見直すことなくして、効果的な家庭援助は実現しない。すなわち、援助者である保育士の認知する親役割と被援助者である母親自身が認知する親役割認知についての差異や歪みを明らかにし、個人化傾向にある社会で WLB を実現する親役割について再構成することが有用な社会的援助には不可欠である。

WLB における多重役割は、配偶者との相互作用や仕事には有益だが、家事や介護には時間的制約を与えるため障害となると指摘されているが、親役割との関わりについては一貫した結果が得られていない（小泉，1997）。その原因の1つとして、従来の親役割尺度の項目が、親子間・夫婦間の相互作用に限定されており、親の多重役割のバランスへの注目がなされていないことが考えられる。男女共同参画社会の実現と女性の家庭役割の専従からの解放を背景として、夫婦の多重役割に焦点を当てた親役割の認識が親と保育士等の援助者との間で共有されるならば、家族内の共感性や相互理解そして個人の時間の確保に資すると期待できる。この親の WLB を実現するためには保育士等の社会資本の活用は不可欠であり、現代日本の社会状況に適合した福祉援助の構築に寄与すると考えられる。

本研究は、WLB を骨子とする乳幼児の親役割尺度の作成を通じて、仕事と生活の葛藤（＝WLC）を低減できる新たな親役割を明らかにすることを目的とする。

研究の端緒として、**研究Ⅰ**では、予備調査と、現職の保育士が親に期待する親役割を明らかにするための保育士が考える親役割調査を行う。また、**研究Ⅱ**では、研究Ⅰで得た、保育士による親役割に対して保育園に乳幼児を通園させる親に重要度評定を求め、保育士と母親の親役割認知の比較検討を行う。

2. 研究Ⅰ 保育士が考える「親役割重要度評定」

(1) 方法

保育士が期待する親役割に関する情報を収集するために、関西の保育園に勤務する保育士 20 名を対象に予備調査を実施した。回収数は 20、回収率は 100% であった。調査期間は 2010 年 9 月で、「保育士実践講座³⁾」において、調査に同意を得た保育士に対して、第一筆者が質

問紙を配布・回収した。質問内容は ①対象者の属性に関する項目(4項目):性別,年齢,子どもの有無,勤続年数,②保育士が期待する親役割に関する質問について自由記述で回答を得た。その結果,対象者は全て女性保育士であり,対象者(保育士)の平均年齢は28.55歳($SD=8.21$)であった。第一筆者,第二筆者,保育士経験26年の主任保育士の3名がKJ法に準拠し,収集した質問紙の回答を意味内容が同一または同義・類似するものについては一つにまとめ,回答が一文であっても,意味内容が分割されるものについては,複数に分けて項目群を形成した。保育士が期待する親役割として総数115の回答を得た。それらは,“愛情表現(43)”,“生活基礎訓練(30)”,“共感的理解(30)”,“保育士・保育園との連携(12)”,の4カテゴリーに分類された(Table 1参照)。予備調査の結果,「愛情表現の不足」,「基本的生活習慣の認識不足」,「共感性の欠如」,「保育士・保育園との連携不全」といった保育現場の厳しい実態が明らかにされたが,保育士が期待する親役割には,「夫婦の連携」,「仕事と家事の相互作用」,さらには「個人的時間の確保猶予性」に直接触れた項目は得られなかった。以上を予備調査とし,以下の研究上で使用する親役割に関する質問項目の一部とした。

調査時期:2011年3月

調査方法:質問紙調査。関西の5ヵ園において,調査に同意を得た保育士に対して調査者が質問紙を配布し,153部回収(1部は欠損)した(回収率:65.7%)。

調査対象:調査に同意を得た関西の5ヵ園の保育士に対して,調査者(第一筆者)が233部の質問紙を配布した。

性別年齢構成:男性11名,女性141名,平均年齢は34.88歳($SD=10.28$)

親役割に関する質問項目:2011年9月の予備調査で,20名の保育士が(中・高校生の子どもの持つ)親役割診断尺度(谷井・上地,1993)を改定した親役割尺度,ワーク・ライフ・バランス(金井,2002),予備調査から収集したデータから,第一筆者,第二筆,保育士経験26年の主任保育士の3名が尺度の内容を選別し,それらから48項目を選定した。

(2) 結果

調査対象の保育士152名が親に対して期待する役割尺度の重要度を“重要である”から“重要でない”までの4項目で回答することを求めた。

まず,保育士の期待する親役割期待尺度48項目の平均値,標準偏差を算出しTable 2に示した。また,保育士の重要度評定において以下の10項目が3.7以上の平均評定の高得点であった。「29 子どもの良いところを見つけて褒める(3.86)」,「34 家族の安心安全な関係を作る(3.79)」,「16 知る喜びを親子で共有する(3.77)」,「25 未熟だが,わが子を愛する気持ちは,誰にも負けないと実感する(3.75)」,「41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する(3.73)」,「27 子どもと歌を歌ったり,絵本を見て一緒に遊ぶ(3.73)」,「28 笑顔で『高い,高

Table1 保育士の親役割期待

① 愛情表現
・声かけをしてほしい (10)
・触れ合ってほしい (9)
・ほめてあげてほしい (8)
・抱きしめてほしい (6)
・笑顔を見せてほしい (3)
・一緒に遊んでほしい (一緒に絵本を見てほしい) (3)
・歌を歌ってほしい (2)
・子どもの質問に答えてほしい (2)
② 生活基礎訓練
・甘やかさないでほしい (6)
・規則正しい生活リズムをつけてほしい (5)
・安心・安全な環境を作ってほしい (4)
・本当にしてはいけないことを伝えてほしい (4)
・できることは子どもにさせてほしい (2)
・良くない時は厳しくと叱ってほしい (2)
・集中や意欲が育まれるような育児方針を持ってほしい (1)
・ミルクや食事を与えてほしい (1)
・子どもは一人の人間として扱ってほしい (1)
・公園や子育てステーションに出向き、異年齢での関わりを大切にしてほしい (1)
・自分なりに考えるようにフォローしてほしい (1)
・叱った後は、子どもの気持ち立ち直るように必ずフォローしてほしい (1)
・大人の生活リズムや欲求に子どもを付き合わせないでほしい (1)
③ 共感的理解
・子どもの話を聞いてほしい (7)
・子どもが指さしすることに共感してほしい (4)
・子どもの成長を見守ってほしい (4)
・一緒になって喜んだり悲しんだりしてほしい (3)
・子どもの気持ちを受け止めてほしい (3)
・子どもの思いによりそってほしい (2)
・自信をつけさせてほしい (1)
・子どものことを知ろうとしてほしい (1)
・子どもと楽しんでほしい (1)
・子どものことを第一に考えてほしい (1)
・子どもの目線で行動してほしい (1)
・満足いくまでさせてほしい (1)
・すぐに叱らないでほしい (1)
④ 保育士
・保育園との連携
・ゆっくりとした時間を持ってほしい (3)
・すべての持ち物に名前を記入する時間を作してほしい (2)
・家での様子をもっと教えてほしい (1)
・相談してほしい (1)
・子育て仲間をつくってほしい (1)
・ロッカーの中の服やオムツの補充を毎日確認してほしい (1)
・登園時間ぎりぎりに来るのではなく、少し早めにつれてきてほしい (1)
・子どもが手を伸ばして母を呼んでるのに、淡々と帰る準備をしないでほしい (1)
・子どもほったらかし、親同士の会話をなくしてほしい (1)

※ () 内数は回答数を示す。

Table 2 保育士の親役割期待項目得点平均・分散 min=1.00 max=4.00

no 質問項目	n	min	max	mean	SD
29 子どもの良いところを見つけて褒める	152	1	4	3.86	.421
34 家族の安心安全な関係を作る	152	2	4	3.79	.425
16 知る喜びを親子で共有する	152	1	4	3.77	.495
25 未熟だが、わが子を受取る気持ちは、誰にも負けないと実感する	152	2	4	3.75	.492
41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する	152	1	4	3.73	.501
27 子どもと歌を歌ったり、絵本を見て一緒に遊ぶ	152	1	4	3.73	.552
28 笑顔で「高い、高い」などをして子どもとふれあう	151	2	4	3.72	.556
10 何かに興味を示しているときには、そっと見守る	152	1	4	3.72	.557
40 全ての持ち物に名前を書く	152	1	4	3.70	.607
32 子どもが自分自身で考える時間を持つように配慮する	152	1	4	3.70	.540
13 先回りして答えを与えずに、できるだけ子どもに考える時間を与える	152	1	4	3.69	.601
42 登園・降園時、子どもの様子に配慮する余裕を持つ	152	1	4	3.69	.567
46 家庭で過ごす時間と職場での時間のバランスがとれている	152	2	4	3.68	.520
35 子どもの感情表現に共感する	152	1	4	3.68	.535
30 子どもの成長にあったルールやマナー、スキルを身につけさせる	152	1	4	3.64	.570
21 いい絵本を選んで一緒に感動しながら読み聞かせをする	152	1	4	3.63	.607
47 家庭でのストレス・職場でのストレスを各々うまく処理している	152	1	4	3.61	.589
5 子どものトイレの間隔や好き嫌いは、だいたい把握している	151	2	4	3.60	.590
37 家庭での子どもの様子や対応を保育士に伝える	152	2	4	3.60	.543
31 子どもの興味・関心や疑問に誠実に応える	152	2	4	3.59	.556
33 子どもの発達に配慮し、家族全員が規則正しい生活リズムを守る	152	1	4	3.57	.616
45 園の参観などの行事に積極的に参加する	152	1	4	3.55	.561
12 園であった出来事について、興味・関心をもって質問する	152	2	4	3.54	.629
7 子どもの理解について園の先生と意見が異なる時は納得いくまで話し合う	151	2	4	3.51	.599
44 (親) 自身の健康や身なりに配慮する	152	1	4	3.49	.609
36 親自身がのんびりする時間を持つ	152	1	4	3.47	.629
14 子どもが間違っている、叱らないでなぜ間違いかを一緒に考える	152	1	4	3.47	.670
4 子どもが何をしてほしいかはだいたいわかっている	152	1	4	3.43	.668
20 子どもが一人でなかなかできないことで困っているとは、褒めながら手伝う	152	2	4	3.38	.630
43 家族みんなでお散歩やピクニックに出かける	152	1	4	3.38	.698
39 安心して信頼できる子育て仲間を作る (インターネット友達も含む)	152	1	4	3.34	.718
48 家庭で役立つ行動と職場で役立つ行動をどちらの場面でも巧く活用している	151	1	4	3.33	.661
17 子どもが初めて経験することは私(親)も一緒にやるようにしている	152	2	4	3.30	.699
24 親として出来るだけのことはしている	151	1	4	3.28	.667
19 いろいろなお友達と遊べるように配慮する	152	1	4	3.26	.741
3 よその子どもと比較して欠点が気になる※	151	1	4	3.21	.715
15 いろいろなことに関心がもてるように図書館や動物園などへ連れて行く	152	2	4	3.20	.665
23 子どもに問題があるのは自分(親)のせいだと思い、常に自分を責める	152	1	4	3.15	.761
38 些細な事でも保育士に相談する	152	1	4	3.11	.702
18 子どもの成長・発達に必要な情報は、常に集めている	151	1	4	3.08	.779
26 子どもの話を、他のことをさておき聞く	152	1	4	3.03	.736
6 接触(触れ合う)時間は少なくとも、子どものことを理解できている	151	1	4	2.96	1.006
8 子どもの言うことやすることを理解しようとしめない※	146	1	4	2.95	1.217
2 おとなの基準で生活態度を注意する※	150	1	4	2.93	.906
1 子どもを褒めるより叱ることの方が多い※	149	1	4	2.81	.825
11 手順がめちゃくちゃでも、子どもが納得するようにさせる	151	1	4	2.81	.830
22 子育てについて後悔することが多い※	152	1	4	2.39	.772
9 子どもには早く大きくなって欲しい反面、私から離れていくのが淋しい	149	1	4	2.38	.683

※ = 逆転項目

い』などをして子どもとふれあう（3.72）」、「10 何かに興味を示しているときには、そっと見守る（3.72）」、「40 全ての持ち物に名前を書く（3.70）」、「32 子どもが自分自身で考える時間を持つように配慮する（3.70）」。

保育士が認知する親役割の構造を明らかにするために、項目の評定点に基づき、主因子法による因子分析を行い、プロマックス回転後、固有値の推移などから、5 因子構造が適切であると判断した（Table 3 参照）。なお、回転前の 5 因子で 26 項目の全分析を説明する割合は 57.09% であった。

各因子の解釈と命名を行うと、第 I 因子は、「30 子どもの成長にあったルールやマナー、スキルを身につけさせる」、「34 家族の安心安全な関係を作る」、「33 子どもの発達に配慮し、家族全員が規則正しい生活リズムを守る」など 9 項目から構成され、家族が子どもを中心に据えて、子どもの成長を促進し、社会性の開発に配慮する項目が高く負荷していることから、“個

Table 3 保育士が考える親役割尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項目内容	I	II	III	IV	V
30 子どもの成長にあったルールやマナー、スキルを身につけさせる	.771	.037	.014	-.054	-.102
34 家族の安心安全な関係を作る	.685	-.097	.306	.015	-.129
28 笑顔で「高い、高い」などをして子どもとふれあう	.672	-.081	-.110	.193	-.035
35 子どもの感情表現に共感する	.658	-.020	.226	-.130	.068
29 子どもの良いところを見つけて褒める	.635	.014	-.130	-.007	.184
31 子どもの興味・関心や疑問に誠実に応える	.590	.092	.001	.066	.060
27 子どもと歌を歌ったり、絵本を見て一緒に遊ぶ	.521	.052	.019	.328	-.091
25 未熟だが、わが子愛する気持ちは、誰にも負けないと実感する	.519	.044	-.078	-.094	.041
33 子どもの発達に配慮し、家族全員が規則正しい生活リズムを守る	.467	.026	.097	.078	-.050
19 いろいろなお友達と遊べるように配慮する	-.061	.817	.016	-.036	.028
18 子どもの成長・発達に必要な情報は、常に集めている	-.061	.707	.112	.057	-.070
17 子どもが初めて経験することは私（親）も一緒にやるようにしている	.117	.658	.062	-.104	.026
20 子どもが一人でなかなかできないことで困っているとは、褒めながら手伝う	.230	.534	-.082	.019	.091
15 いろいろなことに関心がもてるように図書館や動物園などへ連れて行く	-.036	.411	.201	.026	.163
37 家庭での子どもの様子や対応を保育士に伝える	.107	.054	.693	-.051	-.074
46 家庭で過ごす時間と職場での時間のバランスがとれている	.061	-.105	.671	-.007	.229
39 安心して信頼できる子育て仲間を作る（インターネット友達も含む）	-.115	.114	.536	.014	-.060
38 些細な事でも保育士に相談する	.055	.148	.481	-.054	-.251
45 園の参観などの行事に積極的に参加する	-.211	.193	.470	.384	-.016
47 家庭でのストレス・職場でのストレスを各々うまく処理している	.194	-.061	.467	-.087	.258
41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する	-.035	-.024	-.068	.925	.027
42 登園・降園時、子どもの様子に配慮する余裕を持つ	-.021	-.097	.281	.604	.060
40 全ての持ち物に名前を書く	.194	.025	-.151	.585	.021
13 先回りして答えを与えずに、できるだけ子どもに考える時間を与える	-.094	-.075	.081	.027	.751
14 子どもが間違っている、叱らないでなぜ間違いかを一緒に考える	.021	.149	.011	-.024	.478
10 何かに興味を示しているときには、そっと見守る	.118	.102	-.293	.123	.425

因子間相関行列	I	II	III	IV	V	α 係数
I	—	0.47	0.60	0.53	0.39	.868
II		—	0.50	0.46	0.24	.812
III			—	0.43	0.36	.759
IV				—	0.31	.751
V					—	.609

人的生活基礎訓練”($\alpha=.868$)と命名した。

第Ⅱ因子は、「19 いろいろなお友達と遊べるように配慮する」,「18 子どもの成長・発達に必要な情報は、常に集めている」など5項目から構成され、子どもが社会とのつながりを開発する項目が高い負荷されていることから、「社会的生活基礎訓練」($\alpha=.812$)と命名した。

第Ⅲ因子は、「37 家庭での子どもの様子や対応を保育士に伝える」,「46 家庭で過ごす時間と職場での時間のバランスがとれている」,「38 些細な事でも保育に相談する」,「47 家庭でのストレス・職場でのストレスを各々うまく処理している」など6項目から構成され、WLBに関係する仕事と家事の相互作用の2項目が“保育士・保育園との連携”が含まれる項目に含まれていることから、「保育士との連携による WLB」($\alpha=.759$)と命名した。

第Ⅳ因子は、「41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する」,「42 登園・降園時、子どもの様子に配慮する余裕を持つ」,「40 全ての持ち物に名前を書く」の3項目から構成され、親役割の受け入れを示し、「親役割受容」($\alpha=.751$)と命名した。

第Ⅴ因子は、「13 先回りして答えを与えずに、できるだけ子どもに考える時間を与える」,「14 子どもが間違っている、叱らないでなぜ間違っているかを一緒に考える」,「10 何かに興味を示しているときには、そっと見守る」の3項目から構成され、「育児スキル」($\alpha=.609$)と命名した。

(3) 考察

調査の結果、保育士が期待する親役割では、各項目に対する重要度評定の結果から「29 子どもの良いところを見つけて褒める (3.86)」,「34 家族の安心安全な関係を作る (3.79)」,「25 未熟だが、わが子を愛する気持ちは、誰にも負けないと実感する (3.75)」といった愛着形成に関する項目についての重要度を高く評価していることが示されているといえよう。これらの項目についての高い重要度評定は翻って、現代日本における乳幼児と親の関係における愛着形成が従来の自然の親子の営みとして形成されることが困難な状況にあり、保育士の支援として注目に値する課題となっていることを示唆しているともいえよう。

因子分析の結果から、保育士による親役割は、「個人的生活基礎訓練」,「社会的生活習慣」,「保育士との連携による WLB」,「親役割受容」,「育児スキル」の5つの概念による構成されていることが明らかにされた。しかし、親役割に満足感を与えるとされる夫婦の連携(柏木・若松, 1994)に直接触れた項目や個人化傾向にある家庭形成では重要な課題である母親個人の時間確保に関する項目は得られなかった。日本の男性は他の国の男性と比べて、子育てや家事に割く時間が極端に少ない(内閣府, 2006)。その結果、子育て不安が低く、育児不安を抱える母親への共感性や悩みの深刻さの察知が遅く虐待へつながるケースもある。

保育士は母性神話、3歳児神話⁴⁾に囚われることなく親の多重役割の有用性を熟知し、夫婦の連携を促進し、WLCの低減へとつながる視点が望まれる。

3. 研究Ⅱ 親が考える「親役割重要度評定」

(1) 方法

調査時期：2011 年 2 月～3 月

調査対象：調査に同意を得た関西の 5 ヶ園の親 98 名に対して、調査者（第一筆者）が質問紙を配布・回収した。

性別年齢構成：98 名（男性 4 名，女性 94 名），平均年齢は 35.61 歳（SD=6.10）

分析方法：大森・太田（2011）の保育士を対象とした親役割期待尺度とワーク・ライフ・バランス（金井，2002）から収集したデータから，第一筆者，第二筆者，保育士経験 26 年の主任保育士の 3 名が尺度の内容を選別し，それらから 48 項目を選定した。回答は全く重要でないと思う（1 点）～とても重要である（4 点）の 4 件法で回答を求めた。

(2) 結果

親が考える親役割重要度評定として 98 名から回答を得た。乳幼児の母親による，親役割重要度評定の結果では，「13 先回りして答えを与えずに，できるだけ子どもに考える時間を与える（3.76）」，「29 子どもの良いところを見つけて褒める（3.76）」，「34 家族の安心安全な関係を作る（3.72）」といった 3 項目の平均値が 3.7 を超える高い重要度評定を得た。保育士の重要度評定では，3.7 を超える重要度評定を得た項目が 10 項目であったが，同様の項目に対する親評定では，3.7 を超えた項目は 3 項目であったことから，乳幼児をもつ親の親役割の重要性についての認知が分散していることを示していると言えよう。一方，保育士の重要度評定では，3.7 で 10 位であった「13 先回りして答えを与えずに，できるだけ子どもに考える時間を与える」が親評定では 3.76 で 1 位であったことから親役割として子どもを一人の個人として自立して育てることが親役割として共通に重要であることが示されているという（Table 4 参照）。

親が考える親役割重要度として 98 名から回答を得た。主因子法・プロマックス回転で因子分析を行ったところ，3 因子が抽出され，因子項目内容から，第Ⅰ因子を“保育士との連携による WLB”（ $\alpha=.862$ ），第Ⅱ因子を“育児スキル”（ $\alpha=.806$ ），第Ⅲ因子を“親役割受容”（ $\alpha=.744$ ）と命名した（Table 5 参照）。保育士と親の親役割で共通する因子は“保育士との連携による WLB”，“育児スキル”，“親役割受容”であったが，親が考える親役割重要度評定には，“個人的生活基礎訓練”，“社会的生活基礎訓練”に直接触れた因子は得られなかった。

Table 4 親が認知する親役割項目得点平均・分散 min=1.00 max=4.00

no 質問項目	n	min	max	mean	SD
13 先回りして答えを与えずに、できるだけ子どもに考える時間を与える	98	3	4	3.76	.432
29 子どもの良いところを見つけて褒める	98	2	4	3.76	.478
34 家族の安心安全な関係を作る	98	2	4	3.72	.513
16 知る喜びを親子で共有する	98	2	4	3.68	.549
12 園であった出来事について、興味・関心をもって質問する	98	2	4	3.67	.493
10 何かに興味を示しているときには、そっと見守る	98	2	4	3.61	.568
32 子どもが自分自身で考える時間を持つように配慮する	98	2	4	3.61	.549
30 子どもの成長にあったルールやマナー、スキルを身につけさせる	97	2	4	3.61	.587
31 子どもの興味・関心や疑問に誠実に応える	98	2	4	3.59	.571
45 園の参観などの行事に積極的に参加する	98	2	4	3.58	.516
37 家庭での子どもの様子や対応を保育士に伝える	98	2	4	3.54	.559
25 未熟だが、わが子愛する気持ちは、誰にも負けたいと実感する	98	2	4	3.53	.578
4 子どもが何をしてほしいかはだいたいわかっている	98	2	4	3.53	.613
35 子どもの感情表現に共感する	98	2	4	3.52	.578
27 子どもと歌を歌ったり、絵本を見て一緒に遊ぶ	98	1	4	3.51	.646
44 (親) 自身の健康や身なりに配慮する	98	2	4	3.49	.579
28 笑顔で「高い、高い」などをして子どもとふれあう	98	1	4	3.49	.721
42 登園・降園時、子どもの様子に配慮する余裕を持つ	98	2	4	3.47	.578
33 子どもの発達に配慮し、家族全員が規則正しい生活リズムを守る	98	1	4	3.44	.690
43 家族みんなでお散歩やピクニックに出かける	98	1	4	3.43	.718
17 子どもが間違っても、叱らないでなぜ間違いかを一緒に考える	98	1	4	3.42	.687
47 家庭でのストレス・職場でのストレスを各々うまく処理している	98	2	4	3.40	.654
15 いろいろなことに関心がもてるように図書館や動物園・植物園などへ連れて行く	98	1	4	3.37	.694
36 親自身がのんびりする時間を持つ	98	1	4	3.36	.790
46 家庭で過ごす時間と職場での時間のバランスがとれている	98	1	4	3.34	.625
41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する	98	1	4	3.33	.770
5 子どものトイレの間隔や好き嫌いは、だいたい把握している	98	1	4	3.30	.763
21 いい絵本を選んで一緒に感動しながら読み聞かせをする	98	1	4	3.29	.658
7 子どもの理解について園の先生と意見が異なる時は納得いくまで話し合う	98	1	4	3.29	.746
6 接触(触れ合う)時間は少なくとも、子どものことを理解できている	98	1	4	3.22	.831
39 安心して信頼できる子育て仲間を作る(インターネット友達も含む)	98	1	4	3.21	.803
17 子どもが初めて経験することは私(親)も一緒にやるようにしている	98	1	4	3.19	.808
20 子どもが一人でなかなかできないことで困っているとは、褒めながら手伝う	98	2	4	3.18	.694
24 親として出来るだけのことはしている	98	1	4	3.18	.694
40 全ての持ち物に名前を書く	98	1	4	3.16	.756
3 よその子どもと比較して欠点が気になる ※	98	1	4	3.14	.812
48 家庭で役立つ行動と職場で役立つ行動をどちらの場面でも巧く活用している	98	1	4	3.14	.732
8 子どもの言うことやすることを理解しようとしない ※	98	1	4	3.13	1.042
11 手順がめちゃくちゃでも、子どもが納得するようにさせる	98	1	4	3.11	.772
19 いろいろなお友達と遊べるように配慮する	98	1	4	3.10	.753
18 子どもの成長・発達に必要な情報は、常に集めている	98	2	4	3.02	.658
26 子どもの話を、他のことをさておき聞く	98	1	4	2.94	.784
38 些細な事でも保育士に相談する	98	1	4	2.88	.816
9 子どもには早く大きくなって欲しい反面、私から離れていくのが淋しい	98	1	4	2.68	.768
1 子どもを褒めるより叱ることの方が多い ※	98	1	4	2.68	.892
2 おとなの基準で生活態度を注意する ※	98	1	4	2.66	.786
22 子育てについて後悔することが多い ※	98	1	4	2.61	.755
23 子どもに問題があるのは自分(親)のせいだと思い、常に自分を責める	98	1	4	2.02	.773

※ = 逆転項目

Table 5 親が考える親役割尺度の因子分析結果（Promx 回転後の因子パターン）

項目内容	I	II	III
43 家族みんなでお散歩やピクニックに出かける	.753	.552	.429
39 安心して信頼できる子育て仲間を作る（インターネット友達も含む）	.710	.359	.335
16 知る喜びを親子で共有する	.699	.396	.470
19 いろいろなお友達と遊べるように配慮する	.655	.297	.426
38 些細な事でも保育士に相談する	.649	.453	.570
48 家庭で役立つ行動と職場で役立つ行動をどちらの場面でも巧く活用している	.626	.436	.496
36 親自身がのんびりする時間を持つ	.624	.302	.237
35 子どもの感情表現に共感する	.603	.370	.550
47 家庭でのストレス・職場でのストレスを各々うまく処理している	.463	.332	.201
24 親として出来るだけのことはしている	.430	.216	.221
13 先回りして答えを与えずに、できるだけ子どもに考える時間を与える	.415	.694	.179
10 何かに興味を示しているときには、そっと見守る	.299	.692	.291
14 子どもが間違っている、叱らないでなぜ間違っているかを一緒に考える	.388	.679	.431
32 子どもが自分自身で考える時間を持つように配慮する	.551	.673	.573
27 子どもと歌を歌ったり、絵本を見て一緒に遊ぶ	.546	.644	.479
41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する	.284	.423	.670
33 子どもの発達に配慮し、家族全員が規則正しい生活リズムを守る	.479	.337	.656
17 子どもが初めて経験することは私（親）も一緒にやるようにしている	.559	.437	.619
40 全ての持ち物に名前を書く	.271	.552	.590
42 登園・降園時、子どもの様子に配慮する余裕を持つ	.370	.519	.566
5 子どものトイレの間隔や好き嫌いは、だいたい把握している	.163	.016	.409

因子間相関行列	I	II	III	α 係数
I	—	.558	.568	.862
II		—	.544	.806
III			—	.744

(3) 考察

保育士は、「29 子どもの良いところを見つけて褒める (3.86)」、「34 家族の安心安全な関係を作る (3.79)」、「16 知る喜びを親子で共有する (3.77)」、「25 未熟だが、わが子を愛する気持ちは、誰にも負けないと実感する (3.75)」、「41 園に預ける補充用の服やオムツを毎日確認する (3.73)」、「27 子どもと歌を歌ったり、絵本を見て一緒に遊ぶ (3.73)」、「28 笑顔で『高い、高い』などを子どもとふれあう (3.72)」といった子どもの養護、親子の絆形成に高い重要性を示したが一方で親は、「13 先回りして答えを与えずに、できるだけ子どもに考える時間を与える (3.76)」、「29 子どもの良いところを見つけて褒める (3.76)」、「34 家族の安心安全な関係を作る (3.72)」といった子どもの可能性開発に関する項目に高い重要性を認めていることが明らかになった。このことから、親が求める保育園での知育を偏重した「教育」への指向性がうかがえる。保育士が重視する愛着形成については、親にとっては、重要だと認知するまでもない大前提とされていることも考えられるが親に対して再認識を促す必要があろう。

因子分析の結果からは、項目の重要度評定の結果からも示唆されていたように親による親役割の認知は分散しており、保育士に比べて構造化されていないことが示唆されているといえよう。具体的には、保育士の認知する親役割については、5 因子が抽出されたが、親の認知する親役割は3因子であり、親による重要度評定の分散が大きいため共通した親役割について構成

概念を特定することが困難であることを示唆す結果ともいえよう。今回の因子分析の結果からは親が考える「親役割」には、保育士認知する親役割では因子として抽出された「個人的生活基礎訓練」，「社会的生活基礎訓練」が親の評定の結果からは抽出されなかった。これらの項目については、個人化傾向にある現代日本の家庭での規範意識の所在を最も反映するものであるともいえる。すなわち、「30 子どもの成長にあったルールやマナー、スキルを身につけさせる」、「34 家族の安心安全な関係を作る」といった子どもの安全にかかわるルールや「19 いろいろなお友達と遊べるように配慮する」、「18 子どもの成長・発達に必要な情報は、常に集めている」といった社会性の視点について、乳幼児の親は個人的価値観が反映して共通しており、親がそれを重要だと認知しにくいことが示唆されているとも考えられよう。

4. ま と め

2007年、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」が策定された。「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」では目指すべき社会の姿として、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすと共に、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」を掲げている。その後、5年が経過したが、育児不安を抱えて悩む母親や虐待の惨劇は後を絶たない。子どもの命と笑顔が育まれる家庭と主たる養育者である親を支援する保育士は、日常的に乳幼児の保育にあたり、親との接触の頻度も高く有用な援助者である。保育所保育指針第6章で「（保育士の）その専門性を生かした子育て支援の役割」と謳われ、保育士は親の背景にある生活理解とそれに伴う感情の動きへの心情理解と共感が大切である。具体的には、家庭支援のためのアセスメントツールが必要である。本研究の結果から、保育士と親の親役割間の齟齬が確認された。このことは、具体的には現実の社会環境に適応するために子どもの個人としての能力開発を重視する親と発達段階に応じた親子の相互作用による愛着形成を重視する保育士との観点の差とも理解できる。個別化傾向が進む現代日本においてWLBを背景とする乳幼児の親役割について保育士と親の双方の視点は重要であり、今後両者の重視する親役割についてさらなる情報収集により明確にしていく必要がある。

〔注〕

- 1) 牧野（2010）によると、「ワーク（仕事）と仕事以外のライフ（生活）のバランスをとる指向性をもってやっていく」ことがWLBの核にあり、このバランスが実現した社会とは、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会（仕事と生活の調和憲章，2007）」である。

- 2) 育児不安とは「子どもの現状や将来、或いは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態また無気力や疲労感、或いは育児意欲の低下などの生理的現象を伴ってある期間持続している情緒の状態、或いは態度を意味する。」と牧野（1993）が定義づけている。この育児不安に関する研究は多く、原田（1993）は、育児不安の要因を「母親に出産以前の子どもの接触経験や育児経験が不足していること、母親が子どもの欲求を理解できないこと等」と指摘し、母親への教育と支援の必要性を示唆している。また、富岡ら（2005）は現代の人間関係は「地域の人々との関係が希薄で相談相手が不在という孤立した親を生み出し、育児不安や負担を増加させる要因となっている。」と述べている。
- 3) 2010 年度より、京都市保育園連盟と京都保育士養成研究会とが連携し、専門分野について継続して深く学ぶことで多方面にわたり専門的な知識、技術をもった保育者となることを目的とし、現職保育士のための「保育実践講座」がスタートした。主催は社団法人京都市保育園連盟であり、賛同した保育士養成校の教員十数名が講師となり各講座年 4 回（各回 90 分）、現職の保育士と向き合い、保育士の専門性を高め、職務効力感につながるような講義を実施している。
- 4) 3 歳児神話とは、「3 歳になるまでは母親が自分の手で子どもを育てるべき」という考え方であり、そのきっかけを作ったのはイギリスの精神科医 J. Bowlby の著書“Maternal Care and Mental Health”（1951 年）である。科学的知見や産業構造の転換、人口構造の転換など社会経済状況の変化を背景に定着したとされている（厚生省、1998、大日向、2001 など）。

〔参考文献〕

- E. Greenwood. (1957), *Attributes of a P Professions, Social Work*, Vol. 2.
- 樋口美雄 2008 人口減少社会の家族と地域 日本評論社
- 鎌田久子他 1990 日本の子産み・子育て 勁草書房
- 金井篤子 2002 キャリア・ストレスとワーク・ライフ・バランス 日本労働研究雑誌 503, 54-62.
- 柏木恵子・若松素子 1994「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 柏木恵子 2008 子どもが育つ条件 岩波新書
- 北野幸子他 2006 子育て支援のすすめ ミネルヴァ書房
- 小坂千秋 2004 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因 発達研究第 18 巻
- 厚生労働省 2008 保育所保育指針 平成 20 年度告示 フレーベル館
- 厚生労働省（編）2000 子どもの虐待防止センター調査
- 厚生労働省（編）2009 21 世紀出生児縦断調査
- 牧野カツコ 1982 乳幼児を持つ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要 3
- 牧野カツコ 2010 国際比較にみる世界の家族と子育て ミネルヴァ書房
- 松田茂樹 2008 何が育児を支えるのか 中庸なネットワークの強さ 勁草書房
- McFarlane, W. 1983 *Family Therapy in Schizophrenia*. New York: Guilford Press.
- Minuchin, S. 1974 *Families and family therapy*. Oxford, England: Harvard U. Press.
- 無藤隆他 2008 子育て支援の心理学 有斐閣
- 中谷奈津子 2002 虐待の世代間連鎖と子育て支援事業の認知に関する研究 保育学研究
- 中谷奈津子 2008 地域子育て支援と母親のエンパワーメント 大学教育出版
- 内閣府—平成 18 年度少子化社会白書（本編）「第 4 章 働き方の改革 第 1 節 働き方の現状と課題 2 現状の働き方の問題点（2）男性が子どもと向き合う時間が奪われている」
- 内閣府（編）2010 少子化社会白書（平成 22 年度版）ぎょうせい

- 内閣府(編) 2009 アジア(韓国・シンガポール・日本)における少子化社会対象の比較調査 ぎょうせい
- 西村純子 2009 ポスト育児期の女性の働き方 慶應義塾大学出版会
- 大沢真知子 2006 ワークライフバランス社会へ 岩波書店
- 太田仁 2010 親の援助要請態度に関する実証的・実践的研究 関西大学『社会学部紀要』42巻 27-47.
- Peter Breggin 1997 The Heart of Being Helpful: Empathy and the Creation of a Healing Presence NY: Springer Publishing Company.
- 住田正樹・藤井美保 1998 育児不安に関する研究 九州大学大学院教育学研究紀要
- 橋本俊詔 2005 現代女性の労働・結婚・子育て ミネルヴァ書房
- 高木修 2000 援助とサポートの社会心理学 北大路書房
- 高橋恵子・柏木恵子 1999 発達心理学とフェミニズム 金子書房 1-17.
- 富岡昌子・前田留美・新町豊子 2005 育児支援に関する研究の動向と課題 川崎市立看護短期大学紀要
- 豊田・森田・金敷・清水 2005 日本版 ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀要
- 渡井いずみ・錦戸典子・村嶋幸代 2006 ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度 (Work-Family Conflict Scale: WFCS) 日本語版の開発と検討 産業衛生学雑誌, 48 (3).
- 山田礼子 1999 アメリカにおけるプロフェッショナルの概念とプロフェッショナル教育の実際, 生涯学習研究年報 6.
- 大和正克 2006 社会福祉援助の基底 あいり出版社

[謝辞]

本研究を進めるにあたり、保育園の先生方と保護者の方々に快く調査のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

[付記]

本稿は文部科学省科学研究費補助金の交付を受けた研究(平成24~26年度基盤研究(C)研究課題番号:24530757 研究代表者:大森弘子),及び2012年度佛教大学特別研究費に基づく研究成果の一部をまとめたものである。

(おおもり ひろこ 佛教大学 福祉教育開発センター)

(おおた じん 梅花女子大学)

2012年10月26日受理